

4. パネルディスカッション
(12月14日 オープンセミナー)

4. パネルディスカッション（12月14日 オープンセミナー）

（那珂）私はパネルディスカッションのコーディネーターを務めさせていただきます、（財）ベターリビングの那珂と申します。どうぞよろしくお願いいいたします。

今日のテーマは、「日本型設計・設備の中国における可能性」としておりますが、これは中国側の提案に応じたもので、我が国日本の住宅設計・住宅部品、これらをとりまとめる住宅建設のいろいろな技術が、中国に有効に役立てられるかを考えるものです。今日の午前中のお二人のスピーカーの問題提起を受けて、また新たに日中の専門家の方々3名に加わっていただき、議論いたします。今日の午前中に問題提起していただいた、（株）市浦都市開発建築コンサルタンツの内田さん、中国建築設計研究院国家住宅与居住環境中心の劉さん、そのお二人に加えて、新たに3名の方をご紹介いたします。

最初に、中国松下電工有限公司上海駐在部長の内橋康夫さんです。今日は、部品メーカーのお立場と、内装設計建築のお立場でご発言していただくこととしてあります。次に、丸紅（株）開発建設部門大阪住宅開発部部長代理の藤本秀司さんです。藤本さんも、上海で3年間ほど住宅開発プロジェクトに従事された経験をお持ちでございます。3人目が、中国建築設計研究院標準院副院長の孫国峰さんです。中国で建築設計、標準設計、あるいは規範を作成発行されているお立場でご発言していただくこととしております。日中5名の方、どうぞよろしくお願いいいたします。

今日のパネルディスカッションの論点を明確にするため、全体を2段階に分けてご発言いただくこととしております。はじめに、日中の設計・設備の類似点や相違点をふまえた上で、「日本型設計・設備の中国における導入の必要性・意義」についてご発言いただきます。次に、本題として、その導入の可能性と、取り除かなければならぬ課題についてご発言いただきます。

それではまず第一の論点であります、「日本側設計・設備の中国における導入の必要性・意義」について、ご発言をいただきたいと思います。

それでは最初に、松下電工の内橋さんからお願いいいたします。

（内橋） 松下電工の内橋です。よろしくお願いします。最初にちょっとPRがましいことで申し訳ないのですが、私どもが中国に行ってどのようなことをしてきたかをかいつまんでご説明したいと思います。（パワーポイント資料 p199～202 参照）

私どもは、1997年に上海でユニットバスの製造販売を開始しました。このユニットバスを、これからの中の住宅を変えるという一つの大きなベース商品として、非常に大きな期待を持って導入いたしました。しかしながら、建築構造が日本とちがうことや、スケルトンで販売される等の理由で、結果として断念しました。その後、水廻り商品ですとか、システムキッチン、あるいは内装ドア等の建

材商品を、順次導入してまいりました。それからその後、2002年から2003年にかけて、住宅内装の設計・施工を自らやる会社を、上海と大連で設立いたしました。

その次に、私どもの目から見て、中国の住宅はいったい何が違うのかということを、整理してみました。先ほどのご発表でもあったと思うのですが、一つは建築構造の違い等からくるもの、例えば壁・天井・床がきちっと垂直に上がってないとか、あるいは給水管・排水管の位置が日本と全然違うとか、そういうことでございます。

二つ目は、住宅を供給する方法が違うことからくるものです。先ほどのご発言にもございましたが、現在はスケルトン住宅が主流で、つまり内装は施主が行うものとなっております。

それから三つ目は、生活習慣の違いからくるもの。例えば、キッチンにおける油煙の問題 中華料理で非常にたくさんの煙が出るという問題ですね。あとは、入浴習慣の違いですとか、靴で生活する習慣などです。

私どもから見てまとめてみたもののなんですが、まず一つ目には、中国の住宅産業の歴史がまだ新しいということが上げられるのではないかと思います。まだ中国では、個人が住宅所有するようになってからの歴史は非常に新しいです。そのために、中国のユーザーの皆さんには、自分の住まいに対する価値観、自分はどう暮らすのかといったことがまだ固まっていないように思います。そのために、買い求められる商品が、特に輸入品、その中でも特に欧米製品、これを崇拝する傾向があるように見られます。それから、使い勝手とか住まい勝手ということよりも、たいへん失礼な言い方で申し訳ないのですけれども、どちらかというと、どう自慢するかといったことが気になっているような気がします。

それから大きく二つ目には、現在スケルトンで販売されている住宅がこれから内装付き住宅に今変わって行きつつあります。これから、ユーザーの住宅への知識と価値観がだんだん深まっていくように思います。

それから、住宅の基本的な品質に対する要求が高まってまいります。先ほど劉さんからもお話しがありましたけれども、空気質等々ですね。

最後に、これが一番大きな問題だと思いますが、施工がきちりいかない、うまくできない。速く、きれいに、きちりおさめるということの要求が高まりつつあります。

私どもが内装会社をやる中で、つい先月のことなんですが、中国で日本式の内装・設計・施工を試験的にやってみました。その工事の過程において、たくさんの方が見に来られまして、非常に関心を持って見ていただきました。従来の設計施工は、どちらかというと、あるものに商品を切って貼ったものでしたが、やはりきちりとした施工が基本的には求められているのだということを確信いたし

ました。

中国からたくさんの方が日本に来られて、私どものショールームを見ていただいたときに、「中国に持つていける商品がたくさんあるじゃないか」と言われます。ですから、先ほど申し上げました、内装の設計施工をきっちりすることで、そういうチャンスは非常にたくさん興ってくると確信しております。

(那珂) ありがとうございました。それでは続いて、中国建築設計研究院の孫国峰さんにお願いいたします。

(孫) まず産業化の中で、日本の住宅設備や設計方法などを中国に入れる意義としては、どのようなものがあるかについて簡単に説明いたします。二つのことについてお話しします。まず一つ、中国の経済が急速に発展している中で、住宅との間に起こってきている様々な矛盾についてお話しします。もう一つは、90年代に入り、モデル団地・健康住宅等を普及させてきましたが、その中でどのようなメリットがあったかについて簡単に説明したいと思います。

中国は建国以来、人口が非常な勢いで増加しました。80年代時には、住宅等の基本建設はほとんど発展しませんでした。特に住宅産業については、80年代以後に建設が始まりました。商品住宅（分譲住宅）は、90年代中期以降から急速に発展してまいりました。ここ十年ほどは、中国の住宅産業は非常な速さで発展してきていますが、しかし一つの産業としては、まだ不十分なところがたくさんあります。中国の庶民の住宅ニーズについて言うと、たいへん大きなものがあります。ですから、住宅の建設量は、これから引き続き増えると考えております。中国的都市も最近だんだん拡大しておりますが、それと同様ではないかと思います。

現在、住宅産業において、住宅開発の考え方、計画設計のモジュール、住まい方の研究、住宅部品の開発はみな研究の段階にあると思っています。90年代以後、建設部はモデル住宅弁公室を設立しました。そのモデル住宅弁公室には三つの段階があり、現在は建設部住宅産業化促進センターと言われています。

午前中に劉さんが発表されたように、住宅産業化には三つの発展段階があると思います。それは機能の段階、性能の段階、そして要素の段階であり、現在は要素研究の段階に入っています。現在、住宅産業化促進センターが行っている事業は、そのほとんどが住みやすい住宅の建設・普及です。その意義は三つあると考えていますが、まず一つには住宅産業発展の正しい方向を導き出すことです。その正しい発展方向には、五つの面があると思います。適用性、安全性、耐久性、環境性、経済性です。

二番目には、産業化を推進することです。産業化とは、サステイナブルということです。

三番目には、品質基準を作ることです。午前中に劉さんが話したとおり、すでに中国の住宅性能認定についての仕事はやり始めております。例えば健康住宅団

地を申請する場合でしたら、いろいろな決まりがあり、それに従って申請しなければなりません。当院は、健康住宅の評価を行っております。例えば住宅を建設するとしたら、健康に関してどのような要素を考えるべきか、それについての研究も深まっています。ですから、中国の産業化の発展について言えば、実際には中国人はすでに住宅産業化・部品化の重要性を認識しており、性能化の研究を進めていると言えます。最近私ども設計標準所も不動産会社、設計会社を対象として、「部品選用集」というものを作りました。ですから、中国の住宅産業は、これから急速に歩み出す段階ではないかと思っております。日本の成熟した設計と製品を導入していくことは、おおいに必要なことであり、マーケットも大きいと思います。

(那珂) ありがとうございました。続いて、丸紅(株)の藤本秀司さんにお願いいたします。

(藤本) 丸紅の藤本です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は2001年から3年半、丸紅と地元・上海の資本が合弁で作った「上海好世置業有限公司」というところに出向で行っておりました。その経験を元に、若干お話をさせていただきます。

日中の設計の相違点については、私の感じるところ、大きく二つあると思います。一つは、我々日本の設計というのは、プランから考えて、どこにどういうファシリティが必要か、狭い空間をどう生かしていくかと、まず内部からプランを考えて、それから空間を起こしていくという設計をする傾向があると思います。それに対しまして、中国、特に私がいた上海が特別なのかもしれません、上海では、もちろん内部プランも考えますが、どうしても見た目 外観・見てくれというのを重視する傾向があつて、外観から設計に入ってくる傾向があると思います。ですから、中国側と企画会議で議論しますと、彼らはすぐにパースを作つて、これは見た目がよいとか悪いとかいう議論になりまして、我々はそれを内部プランに落とし込んだときに、これでは使い勝手がよくないのではないかということをよく言ったものです。

二点目は、室内空間、そして全体の外構部を含めた全体設計もそうですけれども、中国の設計というのはどちらかというとやはりお国柄といいますか、国の広さといいますか、おおらかで伸びやかな感じ、それからきらびやかなものを重視する傾向があると思います。それに対しまして、我々日本型の設計というのは、どちらかというと狭い空間をどう効率よく生かしていくかということを考えるのに慣れているせいか、きめ細かな設計を重視するような気がします。

大きく言ってその二点の相違点があるかと思いますけれども、これをふまえていわゆる日本型設計・設備の導入の意義を少し述べてみたいと思います。これにつきましては、内装付き住宅ということで考えてみたいと思います。今中国においては、まだスケルトンの販売手法が主流ですが、これはある意味では住宅の一

つの理想の形だと思います。ただ、まだ中国においては、圧倒的に住宅の量が足りない、住宅を実際に必要としている人が多いという現状からしますと、このスケルトンで売るという状態は様々な問題を持っていると思います。例えば、環境保護という観点からですが、私どもディベロッパーがスケルトンでお客さんにお渡しすると、お客様はその一部をつぶしたりはつたりいろいろなことをして自分で内装されます。そこから出される廃材・残材の量たるや相当なもので、これは大きな問題となってきております。

それから二点目としましては、内装の過程の中で、本来壊してはいけない構造上必要な壁を壊してしまったりする、品質保持・品質管理上の問題があると思います。

三つ目としましては、これが一番大きいのではないかと思うんですが、引き渡しを受けた住戸にすぐ住む必要のある人もいますが、しばらく住む予定のない人もいる。そういう中で、例えば隣に人が住んでいる中で、土日も朝も夜もなく工事をやっているようなことが日常的にありますと、これが隣り住戸どうしのトラブルになっています。

こういう観点から総合的に考えても、ある程度日本型といいますか、パッケージ型にしました内装付き住宅を考えていくことは、ぜひとも必要なのではないかと思います。

(那珂) ありがとうございました。続きまして、午前中のスピーカーであるお二人にお話を伺いますが、中国建築設計研究院の劉さんからお願ひします。

(劉) まず今日の会議にご出席いただいた皆様に感謝の意を表したいと思います。この議題は、私が北京になりましたときに、皆様といろいろと議論しながら出した問題です。皆様にお答えいただき、本当にありがとうございます。

まず私自身の観点を申し上げますが、中国の住宅は健全に発展していると思います。しかも、発展の前途は大きく開けています。なぜ住宅に対して「診断」を行わなければならないのか、しかも外国の皆様に「診断」していただかなければならないのかといいますと、我々は毎日中国に住んでおり、既存の多くの問題について慣れてしまって、すでにおかしくないと思ってしまっているからです。それで、本日ご出席の皆さんから中国の住宅についてのいろいろな問題をあげていただきまして、本当にありがとうございます。

中国と日本の住宅建設において、大きく異なる点があると思います。中国の住宅をなぜ「小康住宅」と呼ぶのか、私は辞書を調べました。日本における「小康」とは、「大きな病気にかかり、治ったばかりの状態」というような解釈です。日本語ではありますが、全くその通りだと思います。というのは、中国は80年代以前には、住宅の量も足りず、住宅における病がたくさんありました。今「小康」というのは、病状が緩和されて、健康の方向に発展している状態だと思います。中

国の住宅は量が不足しているので、急速に発展させる必要があります。ですから、我々は中国の住宅を「ファストフード式住宅」と呼んでいます。これは発展途上国では経なければならない段階であると思います。そういう意味では、我々はすでに一定の段階に入っています。ですから、我々は今冷静に考え、どのように住宅のレベルをアップしていくのかについて検討していかなければならないと思います。

1990年、私は一度日本に留学したことがあります。当時九州大学の青木先生の研究室で勉強しました。学んだ内容は、建築計画学でした。しかし、中国には、残念ながら建築計画学がありません。中国では、建築師の評価は、図面がきれいかどうかです。これまで中国には、そのような科目を教える学校は二つしかありませんでした。ですから、建築計画学がないことにより、建築の中で様々な問題が出てきたのだと思います。もしその問題が解決すれば、日本と考え方・理念などが近くなるのではないかと思います。

最後になりますが、中国と日本とは住宅研究分野において、長期にわたって友好的な協力を進めてきました。前段階は恋愛段階ですが、本格的には結婚・出産の段階に入らなければいけないと思います。日本の技術や設備は、中国のマーケットにおける前途が開けていると思います。以上でございます。ありがとうございました。

(那珂) ありがとうございました。それでは第一段階の最後として、市浦都市開発の内田さんにお願いいたします。

(内田) 皆さんにお話しになったようなことというのは、建物とか住宅の内部、つまり建築物に関わる部分が非常に多かったと思うのですが、私はちょっと視点をえてみたいと思います。私たちは住宅団地というものを日本でもずいぶん計画したり設計したりしてきているんですが、やはりその住宅団地　居住する空間としての住宅地をどう作っていくかという視点をもう少し持った方がよいのではないかと思っています。

中国では、短期間に大量に住宅を造って、処分するという必要性があります。そのためもあると思いますけれども、住宅地・団地自体が非常に画一的で、変化や多様性に乏しい計画に陥りやすいと思います。それは一つには、買う人が、住宅の見た目の豪華さとか、ある意味ではどういう住宅地になるかという中身の問題よりも見た目の問題をわりあい大事に評価しているということもあって、なかなか生活する空間としての団地の評価がしにくいのではないかと思っています。日本でも、集合住宅に生活するようになったのは、太平洋戦争が終わってからが中心で、それほど経験があるわけではないのですが、その段階で、やや専門的になりますが、集まって住む　　“housing”という考え方をどう取り入れていくかについては、いろいろ勉強をしたし、研究もしてまいりました。特に日本では住

宅の規模が小さいせいもあって、自分たちが日常生活する住宅と、そのような住宅が集まってできる住棟　建物と、その建物が集まってできる団地　居住空間をいかに快適に作るか、それからそこにどういうふうにコミュニティ　生活する環境としての仕掛けをつくっていくかに非常に一所懸命だったように思います。中国でも、今でも北京には胡同や四合院というのが残っていますが、そこではやはり生活者のコミュニティが非常に大切にされていて、親密な空間ができると思います。そういう文化を、新しい居住形式である集合住宅にどう展開していくのかという中で、いきなり日本のレベルを通り越して、非常に水準の高い住宅が供給できた、逆にいえば、そういう状況がもう一つ大事なものを忘がちになっているのではないかという気がします。そういう意味から、今後は、そこに「住む」という生活者の視点を大事にした、「集まって住む」という環境を、空間的にも、施設的にも、どう作っていかなければならないかということを再構築していく必要もあるのではないかと思います。それができないないというのではなくて、もう少し新たな展開がありそうな気がしております。そのように感じましたので、まずはお話をさせていただきました。

(那珂) 5人の方、どうもありがとうございました。さすがにプロとしてこの問題の背景をよくご存じで、適切な指摘があったと思います。中国のお二人は、日本型の設計・設備を中国に本格的に導入することについての必要性・意義をやや積極的にお話しになりました。日本のお三方は、それぞれの経験があって、そう単純なことではないぞということを言外にもずいぶんおっしゃったような気がします。

それでは、その点を少しつっこんで第二段階に入りたいと思いますが、このような日本型の設計・設備付き住宅の中国への導入について、必要性・意義はあるという前提で進むとして、その具体的な可能性はあるのだろうか、またあるとしても乗り越えなければならないいくつかの課題があると思いますが、その課題についてどう思っておられるかをまた5人の方からお話を伺いたいと思います。それでは、内田さんからお願いします。

(内田) 具体的なこれからの可能性ということで、少しお話をしますが、今後中国における住宅供給というのは、多分中低所得者向けの住宅供給が増えていくだろうと思います。その場合には、今まででは富裕層が高いお金を出してスケルトン住宅を買って、自分でお金をかけて好きな内装をしていたのだと思いますが、中低価格の住宅になれば、当然その部分も経済的な制約を受けることになると思います。内装付きの住宅が増えるということは、住宅供給者　ディベロッパーがそれを造って渡さなければならぬということになるわけです。ところが、ディベロッパーはこれまでそのような供給をあまりしていませんし、実は設計者も内装付きの設計までちゃんとやって住宅を計画しているというケースは非常に少ない、つまり経験があまりないのではないかと思います。パンフレットには非常にきれい

な絵が描いてあり、モデルルームもできていますが、実際に個々の設計ということで見た場合には、内装設計まで含めた設計がちゃんとできる、つまりそういう設計力を持った設計事務所あるいは設計者がそれほど多くないというふうに私は思います。

それと、先ほども申し上げましたが、内装をやる業者も事業者も家内工業的で、専門的な業者というのは少なくて、それからそこで内装を工事を行う社員の専門的な教育も行われていないというのが実態ではないかと思います。今後はそのディベロッパー　住宅供給者がその責任をとらなければならないということになるわけですが、これを実現するためのいろいろなシステムとか、生産供給体制というのが非常に必要になるのではないかと思います。今後内装付き住宅を普及させていくためには、当然設計者の設計力も上げていかなければなりませんが、住宅の生産とか供給をしていくシステムの合理化、特にモジュール化とか部品化とか、それから中低価格住宅が増えるということでコストダウンということについても、真剣に取り組んでいく必要があるのではないかと思います。

そういう意味で、住宅に対する評価がこれから住宅の「質や内容」に変わってくると先ほどの劉さんのお話にもあったと思いますが、そういう点からも、住宅に対する消費者への情報提供、特に住宅の性能とか性能規定というものをもう少し理解してもらい、実際にそれを普及させていくような体制が大事になってくるのではないかと思います。

(那珂) 内田さん、どうもありがとうございました。日本型設計・設備住宅の中国への導入について、その課題というものを、たいへん体系的にお話しいただいたと思います。次に、劉さんお願いします。

(劉) 私にはもう一つ言いたいことがあります。日本の技術や設備を導入するというのは、中国の住宅を変えることではありません。両方にとって利益があるやり方です。先ほど、中国の住宅と日本の住宅にはどれほどの違いがあるかについてお話ししました。中国は国土が広く、南から北まで様々な住宅があります。日本の住宅についても、地方性はあると思います。しかし、原理はほぼ同じだと思っています。例えば以前いろいろな研究を行ったときに、加藤さんと住宅の平面の間仕切りについて議論しました。例えば、バスルームとトイレを一つの空間に入れるか、別々にするか。これについては、中国でも実際には皆考え方が違うと思います。この問題一つをとっても、中国の住宅は、これまでの「ファストフード式住宅」から、細かいところまで考えなければならない段階に入ったと思います。

1992年、JICAのプロジェクトで研究を行って、「石家荘連盟団地」という団地をつくりました。その住宅団地は非常に大きく、その中に1万m²ほどの実験モデル住宅をつくりました。当時、12万人ほどの中国人が遠くから見学に訪れました。住宅関係に従事している中国人で、当時石家荘の小康住宅を知らない者はなかつ

たと思います。中国と日本の共同研究の成果は、中国で十分に現れたと思います。

今日、中国の住宅は質の段階に入り、当時のモデル住宅はすでに時代遅れになりましたので、日本と協力して、日本の成熟した技術を中国に持ち込み、日本の技術でつくった住宅はどのようなものか、中国人に見せていただきたいと思います。現在、アメリカやヨーロッパの技術が、中国にたくさん持ち込まれていますが、私自身は日本に親しみを感じております。それに、中国の技術と日本の技術はより近いと思います。ですから、日本の技術を中国に導入し、体験室を作つて皆に見せるとよいと思います。

今回日本にまいりまして、私は福岡に行って、恩師に会おうと思っています。すでに十数人が集まつていて、皆、中国の住宅建設の現状が聞きたいようです。ご在席の皆様も関心をお持ちだと思います。

(那珂) ありがとうございました。とても熱の入った劉さんのお考えをお聞かせいただきました。それでは、丸紅の藤本さん、お願ひいたします。

(藤本) 皆様ご承知のように、現在の中国はめざましい経済発展を続けておりまして、その中で不動産についてもどんどん値段が高くなっているという状況が続いております。最新の雑誌からの情報によりますと、上海市内のダウンタウンの一部地域では、1m²当たり5万元の住宅まで出ているといいます。これは、坪単価で言いますと、約200万円くらいですね。そのような不動産の価値がどんどん上がつている中で、単位面積・単位空間当たり、これまでであればおおらかな設計が許されていたものも、やはりそこにきめ細かに効率よくものをあさめていくという日本型の設計を導入していく余地は十分にあるのではないかと思います。特に、ディベロッパーがスケルトンで引き渡しをして、買ったお客様が内装工事をやらされているというのが主流である今の現状におきまして、一番負担の大きい設備設計の部分に結構トラブルも多いです。こういった部分で、日本型の設備設計を導入していくというのは、相当な可能性があると思っています。

ただ、当然乗り越えるべき課題も多々あります。やはり感性や商習慣の違いからくる問題を克服していく必要があります。

一つ具体的な例を申し上げます。これは私たちの開発物件の例です。2001年の秋に、「櫻苑」というタウンハウスで試みに内装付きの住宅を販売しました。30戸ばかり販売したのですが、結果は、よく売れましたけれども、内装付き住宅としては失敗しました。というのは、その隣で同時にスケルトンの住宅も販売していました。我々はそのモデルルームを日本式のティストでまとめていたのですが、その部分は、中国の方に大きな評価を受けました。ただ、隣でスケルトンの住宅と一緒に販売していたために、中国の皆さんには本当に良く内装材料・住宅設備のコストについてご存じですので、その差額の中に私たちディベロッパーの利益が入っていることをすぐに見抜かれてしまいました。そういう意味で、内装付き住

宅をこれから導入していく中でも、我々ディベロッパーが内装付きにする場合に、パッケージとしてよいものをより安く、一人一人が個別に内装をするよりも安いということがお客様に理解されるようにならないと、なかなか難しいということがよくわかりました。また、内装業者の施工精度の質の問題も大きいと思います。

こういう様々な課題を克服していけば、いわゆるビジネスチャンスとしても大きいなる可能性があると私は考えています。

(那珂) どうもありがとうございました。上海・櫻苑での内装付き住宅の実例についてお話しいただきましたが、なるほど、こういうことは起こるだらうなあと思います。日本でも皆さんどこに利益を載せるかには苦労されていると思いますが、そのようなご苦労がよくわかりました。それでは次に、孫さんお願ひいたします。

(孫) まず、日本の設備・設計の技術を中国に導入する必要性は十分であると思います。これは、非常に簡単なことだと思います。マクロ的に見ると、実際、日本の技術を導入することは、双方にとってビジネスになることです。一つには、官側の協力、もう一つは企業間の協力が必要です。官側の交流とは、これまで行われてきた GG 会議のような政策に関する交流です。

企業間の交流としては、今中国では、すでに成功例がたくさんあります。なぜ欧米の企業は中国の住宅分野に多く参入しているのかということですが、それはやはり直接建物を皆さんに見てもらうというやり方だからです。例えば、イギリスは B&Q という店を出し、そこで建材を販売すると同時に内装をやっています。一年あまりの間に大きく発展してきました。確かに安いです。フランスのオーシャン、LEROY MERLIN、さらに早く進出したものとしては、スウェーデンの IKEA もあります。そういうところは、商品を展示しているので、中国人はこれを実際に見て買ることができます。

私のような建築設計を学んだ建築師からすると、やはり欧米に比べると、日本のものの方がより中国に適しているように思います。しかし、日本の設計・材料は、皆よいと言いながら、全く入っていないのが現状です。やはり技術とユニットと一緒に導入しなければダメだと思います。例えば住宅構造システムの技術。日本のプレハブ住宅技術はとても進んでいます。日本のスケルトン住宅は非常に技術が成熟していて、その外壁材料とそれに付随する技術、省エネ技術、システムキッチンの技術、パイプシャフトの技術、インテリジェント化技術、環境保護の技術、防水技術、耐震技術、施工技術、バリアフリー技術など、これらについては非常にすばらしいと思っています。

現在、中国は門戸を開放しております。昔はマーケットはめちゃめちゃでしたが、最近ではだんだん整理されてきました。設計会社にしても施工会社にしても、もし住宅の性能、快適性を上げ、さらにランニングコストを引き下げ、省エネができるような技術を提供することができれば、さらに協力は容易になると思いま

す。ありがとうございました。

(那珂) たいへん力強く具体的なご提案をいただきました。次に、日本の設備・内装技術を一番幅広くやっている松下電工の内橋さんにお願いしたいと思います。

(内橋) 先ほど日本式の施工でやってみたという話をしましたが、いくつかお見せしたいのですが、何が違うかというと、写真ではわかりにくいのですが、すべての壁がコンクリートの壁の上に石膏ボードを付加して作ってあります。その間にある外壁などは皆グラスウールを入れて断熱効果を持たせてあります。非常に簡単なことによって、このあたりのキッチンを作るときなどに、たいへんきれいにおさまります。ところが、ここでまた問題になってくるのが、どうしてもこの角の部分が、普通日本ですとすっきりと直角におさまるのですが、中国ではこんなおさめになるんですね。何がここにあるかというと、例えばこのレンジフードの排気ダクトが通っていたり、排水管が通っていたりということがあります。それから、これをご覧になるとわかりますが、キッチンなんですが、ガスメーターが入ったり給湯器が入ったりして、ここも切り欠いていますね。結局工業製品を使っていても、現場でこんなふうに切ったり貼ったりするので、おさまりがどうしても悪くなる。

こちらはよい例ですが、先ほど劉先生のお話にもありました、水廻りをこんなふうにドライなゾーンとウェットなゾーンの二つに分けるというのがあります。そうすると、この空間でこれまでできなかった例えばお化粧だとか、収納だとか、新しいことができるわけですね。

それで、実は先ほど申し上げたことの妨げになるのが、まずやはりこのスケルトンで売る場合に、全部間仕切り壁ができあがっていることです。この黒い部分が耐力壁なんですが、それ以外のこの部分もすべて最初からできあがっているわけです。一番よいのは、これがすべてなくて、全部すっぽんぽんだったら、好きな内装ができるのにな、とよく思うんですよ。この耐力壁は仕方がないにしても、他のところがすっぽんぽんであれば、これも結構いろいろできると思います。

それから先ほど申し上げました排気のダクトですが、最初から内装を設計するところと建物の設計事務所がこういうものについてきっちり最初から一緒に話をしてやれば、もっともっと工夫ができると思うんですね。ですから、建物を建てるときに、内装をやるチームと一緒にになって最初から考えてやると、非常に内装がきっちりできると思いますし、先ほど私どもがやった二重壁にするというのも非常に無駄なことですから、それがなくなると、コストも当然安くなりますので、そういう意味で、ぜひともそういうことをやっていきたいと思っております。

(那珂) ありがとうございました。きわめて具体的な例で課題についてお話しeidいたんですが、私から質問なんですが、耐力壁はともかくとして、間仕切り壁について、事前に御社は上海の施工業者なりディベロッパーなりと話はしないのです

か？

(内橋) 今はまだできていません。今後の課題だと思います。

(那珂) ありがとうございました。また5人の方には、たいへん有意義なお話をいただいたんですが、それぞれについて皆さんご質問などがあると思います。基本的にこの日本型の設計・設備住宅の中国への導入という観点に絞って、その課題を皆さんから言っていただいたのですが、その点について、賛成でも反対でもいいのですが、ご質問をいただいたらよいと思います。今日は、今回の会議のそれぞれ日本側・中国側のメンバーの他に、特別にこのテーマにたいへんご興味があるという20名ほどの方にご参加いただいてあります。皆さんからでも結構ですから、どうぞご質問いただきたいと思います。パネラーのご協力によって、質疑時間は約45分たっぷりありますので、どうぞご所属とお名前をおっしゃっていただいて、ご質問・ご意見をちょうだいいたしたいと思います。

(林) 中国建築設計研究院の林建平と申します。先ほどの5人の専門家のスピーチを聞いて、皆さん真剣に、慎重に考えていらっしゃいますが、やはり将来性があることを認識していらっしゃるのではないかと思います。日本側は慎重な態度であり、中国側は楽観的な感じがします。

昨日、かつて一緒に仕事をした加藤さんとお話しをしまして、加藤さんから、「私の知っている老朋友の中では誰が車を持っていますか」という質問を受けました。1年ぶりでお会いするのですが、今ではすべての方が車を持っています。そのとき、その車はどこの車かと聞かれましたが、残念ながらみなドイツ製やフランス製で、日本製のものはありませんでした。やはり日本は、車のビジネスについてはチャンスがなくなったと私はとても残念に思います。

二つ目の問題は、中国では皆携帯電話を持っていて、それはアメリカに行ってもどこに行っても使えますが、ただ、日本では全く使えません。最近私どもは住宅調査を行いましたが、一戸当たりの電話代は、光熱費の合計以上にかかっています。日本は二つ目のチャンスもなくしました。今私の電話代は、毎月の支出の7分の1です。

先ほど3人の専門家の方のスピーチを聞いて、なぜそれほどに慎重に考えなければならないのかと思いました。問題は、前向きではなく、昔のことばかり考えすぎていることではないかとおもいます。

内橋先生のおっしゃった問題は、確かにその通りです。例えば中国人は、自分がどのような住宅に住めばよいのかよくわからない。5年前ならそのような考え方非常に進んでいました。しかし、今そのような問題を持ち出すのは前向きではないのではないかと思います。

中国では、住宅づくりは百年の計という言い方があります。96年に住宅をつくったときの考え方とは、三世代にわたって住むというものでした。ですから、住宅

をつくる場合には、三世代が住める 100 年を考えました。しかし、ここに在席している中国の人たちの間には、わずかここ 10 年の間に 3 度も引っ越した人もいます。例えば在席の人たちは、98 年に会社からの最後の住宅分配を受けたのですが、最近は皆新しい住宅を買うという考え方になり、すでに劉さんも大きな住宅を買っています。数年前はどんな住まいに住めばいいのか皆わからなかつたと言えますが、今はそのようなことではなく、どんな内装をすればよいのかが一番の問題と思っています。

10 年前に私が日本の専門家と一緒に研究をしたときに、「住宅部品」という言葉が出てきました。中国の字引の中には今でも「部品」という言葉は入っていません。しかし、新しく出版された建築基準等の中には皆「部品」が入っています。なぜならば、10 年前には直接建築材料を使って住宅を建てていましたが、今は部品を使って住宅を組み立てているからです。

(那珂) ありがとうございました。日本側はあおられているというか、けしかけられているという感じがしないでもないんですが。この林さんのたいへん前向きなご意見にどなたかお答えいただけませんでしょうか。内橋さんお願ひいたします。

(内橋) 先ほど名前が出てきましたので、お答えしたいと思います。私たちの会社はもう 5 ~ 6 年やっているのですが、まだ利益がでるレベルになっていません。それでもまだ私どもは、上海にあります。なぜかというと、きっとうまくいくと信じているからなんです。ちょっと説明がまづかったのか、後ろ向きととられてしまったことは残念なのですが、私は非常に前向きなつもりなんです。

先ほどのお話の中で、まず内装をすることだというのがありました。私の言いたかったのは、今お客様に対して、「こんな住まい方をしたらいいですよ」と言ってくれる人は中国には誰もいないでしょう？ それを私たちが内装の会社を作つてやりたいと思っているんです。ですから、私たちが先頭を切つてそういうことをして、あとでみんながそういうふうになつてくれたらいいと思っています。それができないと、私たちが今中国にいる意味がないと思います。

(那珂) ありがとうございました。林さん、決して後ろ向き、慎重すぎるわけではないということはご理解いただきたいと思います。立石理事長お願いします。

(立石) 建築センターの立石です。パネラーのご意見を聞きながら感じたことを、むしろ林建平さんにかなり激しく言っていただきましたが、私は同じような意見を持っておりますので、少し印象を述べさせていただきます。

日本ももちろんそうですが、中国はさらに現在、生活感の激動期にあるのだと思います。量から質へということがそうですが、戸数をたくさん作ることから、住宅の品質を重視するような時代になってくることがその変化だと思います。ただ、お聞きしておりますと、各パネラーはほとんど共通して、中国の住宅全体がそうなるのではないかという感覚の議論が多すぎるのでないかと思うんです。

価値観が多様化しているわけですから、例えば住まい方を大事にする人もいれば、デザインを大事にする人もいれば、あるいは自分で作るのを大事にしている人もいれば、いろいろと多様化していくのがこれからなんだろうと思います。日本の方もそのうちの一つだと思います。「日本の方式」と皆さん共通しておっしゃつたんですけど、「日本の方式」とはどんなふうにとらえられているのかなあと、聞いていて心配になりました。

かつて40～50年前にアメリカの映画で、引っ越すときにはトランク一つだけで、あとは家具付き・食器付き、さらに壁には絵画がついているような家に引っ越す様子を見て、日本人がショックを受けたというような時期もありました。ただ、日本全体では、家具付き・彫刻付き・食器付きというのは普及しませんでした。そう考えてみると、必ずしも「日本の方式」という言い方でない、もうちょっと技術的な内容で表現したらよいのではないかと思います。それはやはり、これまでの日本でも外国でもそうですが、住宅の歴史を見ると、内装付きの住宅はかなり多数を占めてくる、生活・住み良さを追求する住宅になると、内装をはじめから組み込んだ住宅が多数を占めてくるというのは、歴史的に必然だと思っています。

そう考えたときに、日本ではコンパクトに設備や配管や配線がおさまる組み立て技術と感覚がわりあい強いと思います。ただ、その場合でも、日本がいくら組み立て技術が優れても、欧米の住宅にはそのやり方は入っていかない。やはり欧米は欧米なりのやり方でおさめていると思っています。ですから、内装関係が中国に入っていくときにも、単体で入っていくのではなくて、組み合わせをうまくコンパクトにおさめていく技術は発揮するけれども、中国の住宅の有り様というのがある訳ですから、その中にとけ込むやり方をしなければならないと思います。重ねて申し上げますが、住まい方を大事にする、内装までを一体に仕上げるような住宅供給が、いったい中国でどのくらいあるかということを試し試し見つけていくのが大事だと思っているんです。

なお、低中層の所得階層でやるのはなかなか難しくて、やはり内装を上乗せした価格で売るとすれば、中高所得層をねらわないと難しいかなという感想は持ちました。設計院で実際のプロジェクトにそのようなものを役立てていただきながら、日本としても技術を出して、それが中国に広がっていくことを大きく期待します。謝謝。

(那珂) 後ろにいらっしゃる方で、今の立石理事長の総括とは別に、もう少し素朴なご意見でも結構ですので、何かご質問・ご意見があればお願ひします。山田さんどうぞ。

(山田) ベターリビングの山田でございます。この2日間、たいへん充実した会議に出させていただいております。今の議論の中で、私の印象を2、3述べさせていた

だきます。

日本の住宅部品を作っている会社が、中国を含めた海外に部品を輸出する例というのは非常にまれな例です。輸入はしていますけれども、例えばアルミサッシ、システムキッチン、浴室ユニット、浴槽、給湯その他の製品が外国に輸出されているケースというのは非常に少ないと私は思います。住宅部品は、そもそもその国で生産をしていくことが非常に重要なことで、そのためにBLもお手伝いをしてきましたし、これからもお手伝いをしていくんだと思います。また、黙っていても業界は育ちません。業界を育てたのは、日本ではやはり公営住宅であり、公団住宅であり、ディベロッパーの方々がそういう部品企業を育てたわけです。私の目から見ると、中国におけるディベロッパーがどのくらいそのような部品企業を育てているかに、すでに疑問があります。これからそういう議論をしていきたいと思っております。

(那珂) どうもありがとうございました。これまた割りと冷静な意見を言っていただきました。孫さんが意見があるようですね。

(孫) 先ほどの山田さんのお話を聞いて、多分日本の方は中国の住宅部品に対する現状についてわからないところもあるのではないかと思います。中国建築設計研究院に所属する標準院は、この面の仕事をやっているところです。昨年私どもは、「建築產品選用技術」という本を作りました。非常に厚く、専門的な本です。2セット持ってまいりましたので、日本建築センターとベターリビングに差し上げます。これをご覧いただければ、「建築產品選用技術」が中国の市場で歓迎されていることがわかると思います。中国の部品の例がすべてこの中に入っています。建築・構造・設備・内装をすべて含めています。また、ディベロッパーの選集も作ってきました。ディベロッパー選集の中でも、住宅部品について詳しく述べてあります。これらは毎年修正を加えています。ご参考になればありがたいと思います。もしこのようなものが必要でしたら、私ども設計院にご連絡下さい。

(那珂) ありがとうございます。時間はたっぷりありますから、何かご質問・ご意見のある方、お願ひいたします。

(袁) 時間があるということなので、私自身の意見を言わせていただきたいと思います。それは、5人の専門家の方とも異なるかもしれません、ご参考までに申し上げます。

先ほどの皆様のご説明の中で、一次内装・最低限の内装と、二次内装についてのお話しが出てきて、二次内装が日本の技術導入のための非常に大きな障害になるということでした。私はその見方に対して、異なる意見を持っています。というのは、住宅に関し二次内装というのは、永遠の話題です。建物自体の使用寿命は50年から70年です。ですから、使用していくに当たっては、永遠に内装が必要です。というのは、内装自体の寿命は、躯体の寿命よりも短いからです。私は、

内装付きの住宅に賛成しないわけではありません。しかし、内装付きであっても、住んでいく中ではやはり再度内装をやり直さなければならぬのです。

もう一つ、永遠の話題として「個性化」の問題があります。中国の住宅開発においては、発展のために20年くらいの時間がかかると思います。これほどの大きなマーケットですから、どの国にもビジネスチャンスがあると思います。問題としては、いかに日本の技術を生かして、中国の生活習慣に適応する低成本住宅を開発するかです。というのは、中国人の生活スタイルと日本の生活スタイルは同じとは思わないからです。私たちにしても、日本の部品・設計をそのまま中国に持っていくつもりはありません。中国の設計の中では、まず標準化、モジュール化、そして「人間中心」という考え方を持っていかないといけないと思います。「人間中心」について言いますと、中国の建築師に怒られるかもしれません、ぜひよろしくお願ひしたいと思います。これが私の本音です。

もう一つは、施工水準を引き上げなければならないことです。標準化設計に関して、施工水準、施工品質を引き上げることは、我々四機関がこれから研究していくかなければならない問題です。せっかく四機関の協議書を作ったのですから、ぜひ日本建築センター、ベターリビングは、基準作り、施工水準アップの面でいろいろと応援していただきたいと思います。これは、最も基本であり、根本的な仕事です。四機関がこの仕事をうまくやれば、日本の企業のためにもよいチャンスが作れると思います。ありがとうございました。

(那珂) ありがとうございました。今の袁院長のお話に対し、パネラーの方でどなたかご意見のある方はいらっしゃいますか？ 特になければ、時間の関係であとお一人だけ、李さんお願ひいたします。

(李) 私は中国建築設計研究院標準院の李軍です。先ほどの専門家のスピーチを聞き、私本人の考え方としては、やはり日本の設備・技術を中国に導入することは必要であると思いました。しかし、今日は時間をかけて議論をいたしましたが、キーワードとしては、どう実施するかがいちばん大事だと思います。

私の言いたいことは、消費者の立場から考えなければならないということです。現在、中国の住宅を購入する消費者は、いろいろな考え方を持っています。一つは、自分が住宅を買う場合には、汚染のない内装材料を使いたいと思っています。もう一つには、内装の中で自分の個性を発揮できるものにしたいということです。三つ目には、施工が不安なので、これをいかにレベルアップするかということです。私は調べたのですが、中国の多くの消費者は、住宅を買う場合にだいたいこの三つの考え方を持っているです。

例えば、モデルルームを作っていたら、中国の消費者はみなほしい部品、こうあってほしい施工を自分の目で見ることができます。そのような観点から考えると、日本の設計、施工、部品を中国に持ち込んで、ニーズに合わなければ

どうにもなりません。私は、日本の部品がとても好きです。中国の消費者は、住宅を買ってから3ヶ月ほどの時間をかけて、どんな部品がよいかをあちこち探します。日本の部品はよいですが、まとめて帰る場所がありません。苦労しても、自分に合ったものが探せません。しかし、先ほど孫さんもおっしゃったように、外国の建材スーパーが中国に進出しており、そういうところでは集中して部品を買うことができます。ですから、個人的に思うのですが、北京でも上海でもいいですが、日本も中国に建材スーパーを作って、部品を展示し、販売してはどうでしょうか。例えば北京にはスウェーデンのIKEAがあり、建材を展示販売していて、広く知られています。皆、内装をするときにはまずそこに行きます。私の考え方としては、BLで評価した部品、特に中国すでに生産している例えばTOTO等の製品を、どこか中国の一ヵ所の店で展示・販売してはどうかと思います。今、日本のものは中国にないのではなくて、探すのが難しいのです。これは材料の面からの考え方です。

次は、設計の面からですが、これについても同じことが言えます。日本の設計で住宅を設計してもらおうと思っても、やはり探せません。

その次は、施工についてですが、日本の施工会社が中国に進出するのではなくて、日本は施工管理の経験を生かし、施工管理者を中国に派出して、中国人を育てるのがいちばんよいのではないかと思います。これは個人的な考え方です。

私も設計研究院は今後の基準を作っていますが、よい品物については専門家の認証を行って、全国的に普及させる仕事を行っています。私としては、日本側と精一杯協力し、中国の大きなニーズに応えられるようにがんばりたいと思っています。ありがとうございました。

(那珂) 今日はパネラーの5人の皆さん、そして会場からも6の方からたいへん具体的で意義深いご発言をいただきました。しかし、もう一つ話題がかみ合わなかつたのは、多分最初の問題設定があまりに説明不足だったという感じが、今更ながらしております。ただ、この日中建築・住宅技術交流会議の第1回にふさわしい、中国における設備・内装のいろいろな問題が図らずも浮き彫りになったのではないかと思っております。それで、そういう状況については、もちろん中国の方のほうがよく認識されているわけですから、その中国のそれぞれのお立場から、パネラーの孫さんも劉さんも、そして会場からは袁先生はじめ皆様から言われたのは、非常に前向きに何とかしたいということだろうと思います。これまでの日中センター間の会議等を通じて、今日ご参加の中国の方々は、やはり日本に対して親しみを感じていらっしゃるのだと思います。日本側のパネラーの方も、会場の方も、それなりに中国のことについてお詳しいし、やはり親しみを感じていて、その現状を本音でご披露されたのだと思います。いくつか重要なキーワードが議論になりますて、時間の関係でいちいちはご紹介できませんけれども、立石理事

長と袁院長から提起された、「多様性」というか「個性化」というか、そういうものは大事にしていかなければいけない共通のキーワードだろうなと思いました。それは、日本側の3人のパネラーからもお話をさせていただきましたけれども、確かに日本のシステムとしては得意な分野だろうと思うんですね。それで、あとは劉さんも孫さんもおっしゃっていましたが、それを日本側がある種のビジネスとしてコミットできるかどうか、それを中国側がやはりビジネスとして受け止めもらえるかどうかということまで視野に入れた交流を次の段階として、明日以降考えていけたらいいなと思います。

拙いとりまとめ失礼しましたが、時間もありますので、これにてパネルディスカッションを終了したいと思います。ありがとうございました。

中国における当社の住宅用設備建材の足跡

- 1997年：上海に「ユニットバス」の製造販売を開始
- 1998年：水回り商品(洗面化粧台、浴槽、便器)の製造販売を開始
- 1999年：システムキッチンの製造販売を開始
- 2001年：内装ドア等建材商品の製造販売を開始
- 2002年：住宅内装の設計施工会社を上海で設立
- 2003年：住宅内装の設計施工会社を大連で設立

中国の住宅：何が違うのか？

建築構造の違いからくるもの

- 壁、天井、床
- 給水管、排水管、電気配線

住宅供給方法の違いからくるもの

- スケルトン住宅 = 内装は施主が行う
- 建材・設備の売り場 建材専門店、建材スーパー、システムキッチンはメーカー直販

生活習慣の違いからくるもの

- キッチンにおける油煙の問題
- 入浴習慣の違い
- 靴で生活する習慣

● 中国の住宅産業の歴史はまだ新しい。

● 中国のユーザーは住居に関する価値観…自分はどう暮らすか…がまだ固まっていない。

● 輸入品(特に欧米製品)崇拜の傾向

● 使い勝手、住まい勝手よりも、人にどう自慢できるか

● スケルトンでの販売 内装付住宅

● ユーザーの住宅への知識と価値観が深まる

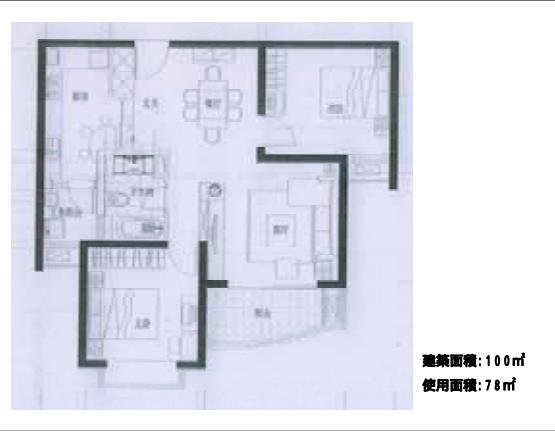
● 住宅の基本品質への要求の高まり(VOD対策、水漏れ、防音等々)

● 施工性に関する要求の高まり(速く、きれいに)

◆ 関心が急速に高まった「環境問題」



建築面積: 145m²



建築面積: 100m²
使用面積: 78m²

◆ 中国のシステムキッチン



◆ キッチンをオープンキッチンにしたいというニーズは強いが……



◆ 日本では考えられない「飲料水」



◆ 給湯器を隠すというニーズ



電気温水器

ガス湯沸器

◆ ガスマータを隠すというニーズ



◆ 中国にしかない「消毒器」



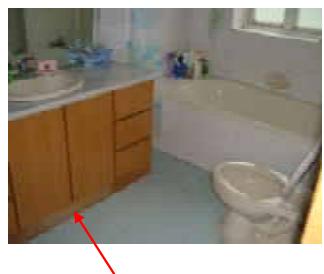
◆ 一般的な衛生間＝バスルーム



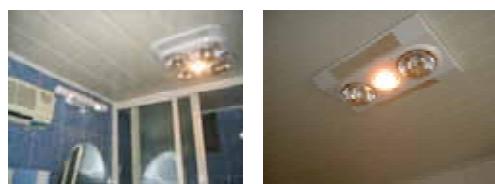
◆ 新しいモノがあつという間に流行する



◆ 使い方に対する耐久性が課題



◆ 中国にしかない？「浴室暖房兼用照明兼用換気扇」



◆ 当社の施工例(日本式の施工でやってみた例)



◆ それでもある課題



◆ バスルームを分ける(乾湿分離)という提案



■ ちょっとPRさせていただきます



5. 会議閉会式

5 - 1 日本側総括

財団法人 ベターリビング

理事長 那珂 正

第1回日中建築・住宅技術交流会議の閉会に当たり、日本側として会議の総括を申し上げます。

中国建築設計研究院、中国建築科学研究院、(財)日本建築センター及び(財)ベターリビングの四機関による第1回日中建築・住宅技術交流会議は、12月13日と14日の2日間東京において開催され、大変活発な議論、意見交換が行われ、大きな成果を上げることができました。

第1日目は、日中建築住宅技術交流に関する調印に引き続き、第1回会議が開催され、午前中は、(財)日本建築センターの立石理事長の議長のもと、四機関よりそれぞれ各機関についてのご紹介をいただきました。いずれの機関も、意義深い公益的な活動を活発に展開されていることが紹介されました。また、午後は、中国建築設計研究院の張文成院長の議長のもと、四機関からそれぞれ1テーマの発表をしていただきました。いずれの発表も、日中両国における最新の情報を提供していただき、それぞれの国の建築・住宅分野の動向を理解する上で、おおいに成果を上げることができました。

本日は、中国側からご提案のあった「日本型設計・設備の住宅の中国における可能性」をテーマに、問題提起とパネルディスカッションを、オープンセミナーの形で行いました。午前中は、中国建築科学研究院の袁振隆執行院長の議長のもと、日中両国の2名の専門家の方から問題提起をしていただきました。また、午後のパネルディスカッションでは、私が議長としてコーディネーターを務め、午前中に問題提起をしていただいたお二人に日中両国3名の専門家の方に新たに加わっていただき、先の「日本型設計・設備の住宅の中国への導入の可能性」について活発な議論を行い、将来につながる大変有意義な交流の機会となりました。

昨日調印されました協定に基づき、2年おきに日中で交互に開催することとされました。が、今回の会議の成功を受け、再来年の2006年中国で開催される会議も、有意義な会議となるものと確信しています。その際には、2008年の北京オリンピック、2010年の上海万国博覧会の開催に向けて、中国の建築・住宅分野がますます発展されているだろうと思います。その発展の様子を間近で見ると今から楽しみにしているところでございます。

最後に、日中両国の四機関の今後ますますの発展を祈念し、日本側の会議総括とさせていただきます。ありがとうございました。

5 - 2 中国側総括

中国建築科学研究院

執行院長 袁 振隆

みなさま、こんにちは。

今回の会議の終了に当たり、私自身の感想をお話しできる機会をお与えいただき、誠にありがとうございます。

今回の会議は、もとの二者協力から現在の四者協力に発展してきました。これは、私たちが時代とともに前進していることを証明しています。私は、四者の協議書に調印することができ、日中両国の建築・住宅面における協力を一步前進させることができると信じております。

会議では、四者が両国の状況と技術を紹介し、皆がそれぞれの協力に対し理解を深めることができたと思います。我々四者は、両国の住宅・建築面における最高レベルを代表するものであり、我々四者の協力を通じて、中日両国の住宅・建築技術の発展を推し進めることができる信じております。

第1回中日建築・住宅技術交流会議において、我々は、工事建築標準、建築技術と建築部品の認証・評価制度、住宅建設と建築技術について及び住宅環境の品質など、皆が共同で関心を持つ問題について交流いたしました。特に、日本の技術・設備などの中国での使用などについて検討し、また、皆熱心に住宅における様々な問題と技術について検討しました。各自の考え方を十分に発表したと思います。特に日本側から紹介された、住宅性能評価と優良部品認定及び住居環境品質などの技術、そして、本日の午後の白熱した討議は、私に深い印象を残しました。この2日間の時間は、短かったです、お互いの交流を通じて我々の間の友誼が深まり、我々の今後の仕事に役立つものである信じております

私は、第1回日中建築・住宅技術交流会議は大成功であり、我々四者の共同の努力の下、所期の目標に達したと思っております。ここで、我々の間の協力をさらに固め、技術交流から実質のある技術交流に移せるよう、我々がともに興味を持つテーマ、ともに注目する建築技術について、共同研究と共同開発を行っていくことを希望します。我々は、この交流の中から、大きな成果を上げ、日中両国の建築業界における技術の進歩を促進できるよう願っております。

最後に、私は、中国建築科学研究院、中国建築設計研究院を代表いたしまして、日本建築センター、ベターリビングの両者の今回の会議のためになされたご厚意、今回の会議にご提供いただいたすばらしい条件とサービス等に関して、心よりの感謝を申し上げます。本日ご在席のすべての皆様、ぜひ北京にいらしてください。どうもありがとうございます。

6. 覚　　書

第1回日中建築・住宅技術交流会議
覚書

財団法人 日本建築センター・財団法人 ベターリビングの招きで、中国建築設計研究院・中国建築科学研究院代表団一行合計 21 名が訪日し、2004 年 12 月 13 日・14 日の両日、「第1回日中建築・住宅技術交流会議」を開催した。

会議第1日目には、日中双方は、各機関の業務紹介を行ったほか、「建築技術・材料の評価・認定」「住宅性能評価制度」等を主たるテーマとして、活発な情報交流・討議を行い、相互の理解を深めた。

第2日目の会議は、「日本型設計・設備の中国における可能性」をテーマに、オープンセミナーの形式で、日中双方から問題提起及びパネルディスカッションを行い、十分な成果を上げ、所期の目的を達し、成功裡に終了した。

ここに、財団法人 日本建築センター・財団法人 ベターリビング、中国建築設計研究院・中国建築科学研究院は、今後の交流を一層発展させる事が有益であることを認識し、2006 年、中国において第2回日中建築・住宅技術交流会議を開催することとし、具体的な時期、議題については相談の上決定することを合意した。

2004 年 12 月 14 日

財団法人 日本建築センター
理事長

中国建築設計研究院
院長

財団法人 ベターリビング
理事長

中国建築科学研究院
執行院長

及匯曙嶄晚秀殿・廖姪室宝住送氏
姥梨村

𠵼夏妖隈繁 晚云秀殿嶄伉、夏妖隈繁晚云胆挫廖姪嶄伉議劔萩，嶄忽秀殿譜柴寫梢併、嶄忽秀殿親僥寫梢併旗燕妖匯佩 21 繁惠諒阻晚云，2004 定 12 塉 13 晚、14 晚曾爺孰蝕阻“及匯曙嶄晚秀殿・廖姪室宝住送氏”。

氏咏及匯爺，嶄晚褒圭茅序佩阻光徭字更議匍曆初府翌，珊參“秀殿室宝・可創議得勺・範協”“廖姪來嬬得勺峯業”葎麼粉，序佩阻鴻刑議佚連住送曠冥網，紗侮阻𦓐札寂議尖盾。

氏咏及屈爺，參巷蝕寫網氏議侘墀，繡“晚云譜柴・譜姥壓嶄忽糞仏議辛嬬來”葎咏粉，喇嶄晚褒圭戾竈諒粉，序佩阻靡粉網胎，函誼阻割蚩議攬惚，器欺阻圓豚議朕議，氏咏岱諾議潤崩。

夏妖隈繁晚云秀殿嶄伉、夏妖隈繁晚云胆挫廖姪嶄伉、嶄忽秀殿譜柴寫梢併、嶄忽秀殿親僥寫梢併範葎云肝住送氏斤序匯化窟婢書朔議住送貢嗤吟議。匯崑揖伉 2006 定壓嶄忽孰蝕“及屈曙嶄晚秀殿・廖姪室宝住送氏”，嗤購醬悶扮寂、咏粉，繡𦓐札」斌遇協。

2004 定 12 塉 14 晚

嶄忽秀殿譜柴寫梢併
併海

夏妖隈繁 晚云秀殿嶄伉
尖並海

嶄忽秀殿親僥寫梢併
併海

夏妖隈繁 晚云胆挫廖姪嶄伉
Center for Better Living
尖並海

第1回日中建築・住宅技術交流会議／報告書

発行日 平成17年3月14日
会議主催者 財団法人日本建築センター・財団法人ベターリビング
中国建築設計研究院・中国建築科学研究院
発行者 財団法人日本建築センター・財団法人ベターリビング
事務局 (財)日本建築センター／国際部
〒105-8438 東京都港区虎ノ門3-2-2
TEL:03-3434-7155
(財)ベターリビング／新事業推進部国際室
〒102-0084 東京都千代田区二番町4番地5
TEL:03-5211-0651
印刷所 株新洋社